

言語感覚を磨く俳句の指導

埋め字の方法を用いて

一、はじめに

俳句隆盛と言われて久しい。しかし、俳句作家の高齢化が問題になり、近年は子ども達の育成に力が注がれるようになった。結社の俳句雑誌にも子ども俳句を募集掲載しているし、地域の文芸祭や全国〇〇俳句大会においても小中学生の俳句を募集している。例えば岐阜市の文芸祭では、一六年度より小中学生の部が新たに設けられ、その中で俳句も募集されることになった。募集は学校単位に案内されるため、当然教師がその応募にかかわることになる。しかし学習の実態を調べると、教科書において俳句教材は、小学校では五・六年、中学校では二年乃至は三年に取り扱われているだけである。そのため応募の指導などは各教員にゆだねられている現状である。本稿は、その指導の助けにと実践した俳句指導の一つの試みである。

二、課題と実践対象

(一) 埋め字の方法を用いて(実践例1・2)

埋め字の方法とは、俳句に空欄を設けてそこに語句を入れる方法である。これは俳句のリズムを体感するには有効な方法である。今回の実践では擬音語・擬態語を入れることにした。「ピーヒャラ」「プオオオ」「ギョッ」など劇画や漫画でよく使われる表現で、子ども達にとっては身近であろうと考えたからである。擬音語・擬態語は、いろいろな音や様子を表現して、受け取る側に直感的にあるイメージを想起させる効果をもっている。その音に何かを象徴させ、新しい世界の発見、詩的実感を具現させる効果的な表現である。

課題 ・ 俳句の完成を通して、俳句のリズム及び俳句表現における

言葉と言葉の結びつきを理解する。

藤 田 万喜子

(二) 鑑賞を通して (実践例3)

課題 ・ 作者が工夫した俳句の表現を通して、言葉と言葉の結びつきがもたらす世界を理解し、味わう。

対象 (一)(二)ともに、実践の対象としたのは、筆者が機会を得て俳句指導に関わることになった中学生、高校生、カルチャー

の受講生(年齢六〇・七〇代、俳句歴一〇年〜一五年の方)である。

三、実践例1 埋め字

課題 次の俳句を完成させたい。空欄にはどのような言葉がよいだろうか。自分で考えて入れてみよう。

雪国や 【 】 時計生き

これを中学生とカルチャーの受講生(以下大人と表現する)に行ってみた。この場合、空欄には擬音語・擬態語が入ることは伏せた。まず、擬音語・擬態語が入りやすいかを調査したかったからである。【 】の中には次のような言葉が補われた。

○中学生の場合

静かな夜に(二人)

白い砂降る

寒い中でも

白い世界で

季節過ぎゆき

緑が白に

寒さに負けずと

花が咲くまで

春を待ってる

静かに歌う

動物たちも

雪で遊んで

土の中では

動きとまるが

つもる心に

私のいのち

○大人の場合

静寂の中

天地動かず

祖父伝来の

炉端に古き

古きぜんまい

ねじ巻古き

わが人生の

塔高々と

閉ざされし部屋まに

補充された言葉は、「時計」を修飾する言葉や「生き」を修飾する言葉ばかりで、擬音語・擬態語はなかった。

中学生が補充した言葉の理由のいくつかを取り上げてみる。

・静かな夜に：雪から静かなイメージが伝わってきた。静かな夜に鳴る時計の方がより際立つと思ったから。

・寒さに負けずと：雪がたくさん降っている中で、時計が力強く生きていると感じたから。

・静かに歌う：雪国で静かにゴーンゴーンと時計が歌っているみたいに思ったから。静かに歌っている時計の気持ちを考えた。

・動きとまるが：雪国の人は雪が降ると身動きがとれないけれど、時計は動き続けている。

「生き」を手がかりに考えていることがよく分かる。大人の場合もやはり手がかりは「生き」であった。大人の場合は、俳句歴もあり、語彙力もあり、作品の世界に迫ろうという意識が感じられ、言葉も練った、凝ったものであったが……。理屈で関係を捉えている。

中学生の場合も大人の場合も擬音語・擬態語を入れるのは難しかったようだ。その原因を、擬音語・擬態語を導き出す言葉が曖昧だからではないかと考えた。例えば「がばと起き上がる」「むくつと跳ね起きた」「むっくり起きた」「海水をがぶつと飲んでしまった」「ジュースをがぶがぶ飲む」「ごくごく水を飲んだ」であれば、起き上がる、跳ね起きる、起きる、飲むという言葉がそれぞれの擬音語・擬態語を状況とかみ合って導き出している。しかし、課題の中の

「生き」ではそこまで限定できなかったのではないか。それゆえ、前後の言葉の関係から、時間を、或いは周囲の状態を、或いは修飾する語句を補うことになったのではないかと考えた。この句は森澄雄の作品で、補充される言葉が「はっはっはっはっ」であることを知らせると、想像もしなかったと言う感想が返ってきた。

そこで、次は擬音語・擬態語が入りやすい作品を選んで同じく空欄補充（埋め字）の実践を行った。

四、実践例2 埋め字

課題 次の俳句を完成させたい。空欄にはどのような言葉がよいだろうか。自分で考えて入れてみよう。

【 】と白壁洗ふ若葉かな

これを高校生と大人（大人は先の実践と同じカルチャーの受講生。先と同じ中学生にも行いたかったが機会がなかった）に行ってみた。この場合、空欄には擬音語・擬態語が入ることをヒントとして知らせた。今度はどのような擬音語・擬態語を導き出すかを調査したかったからである。【 】の中には次のような言葉が補われた。

○高校生の場合

さらさら (八人)
さわさわ
しとしと
そよそよ
ひらひら
ぱらぱら
かさかさ
パシパシ
ざわざわ
ぐいぐい
がしがし
ごしごし (二人)
ゆったり
ゆっくり
いきいき

○大人の場合

さわさわ (四人)
さらさら (二人)
ざわざわ
かさかさ
ぎしぎし
うすうす
ゆらゆら
ひらひら
はらはら
ゆっくり

ているように思ったから。葉が揺れていると思ったから。

・さらさら……若葉は生まれたての葉っぱというイメージがある。

それが風に吹かれると軽い音が鳴りそうだから。

・さらさら……白壁を洗っているのは若葉なので、若葉が壁にこすれている音の感じ。

・ごしごし……若葉が白壁にこすれて、白壁を洗っていると思ったから。洗うといったら、思いついた言葉だった。

・がしがし……若葉が洗われているようにおどっている様子。

・ざわざわ……若葉が風に吹かれている感じ。白い壁を洗っているように思った。

・さわさわ……若葉が洗っているというのは揺れていることかと思っただ。それを想像したらとても爽やかだったので。

高校生達の解釈はかなりのものだった。俳句の世界を理解した上で、言葉を補おうとしている姿勢が伝わってくる。

大人の場合も同様で、補充された言葉は、若葉が持つ、爽やかさ・柔らかさ・たおやかさ・瑞々しさという言葉に触発されたものであった。風が吹いて白壁に若葉が触れる音を表したというのである。

この句は小林一茶の作品で、【 】に挿入される言葉は「ざぶざぶ」である。「ざぶざぶ」は、「かなり大量の液体が揺れ動いて波立

る。
高校生が補充した言葉についての理由のいくつかを取り上げてみる。

・さらさら……葉に対する印象。葉がさらさらと優しく白壁を洗っ

つ連続音・ようす」(『正しい意味と用法がすぐわかる擬音語・擬態語使い方辞典』阿刀田稔子・星野和子 創拓社)を表す擬音語・擬態語で、「〈液体〉が……(と)音を立てる、波立つ。〈人〉が……(と)洗う、流す。」(同前)といった使い方をする。この場合「若葉」を人と見立てて、それが白壁を洗っているというのである。「ざぶざぶ」の表現から、風の強さ・若葉の量まで想像できる。緑と白の色の対比も鮮明に浮かび上がってくる。

挿入される言葉が「ざぶざぶ」であることを知らせると、高校生は納得したようだったが、大人からは「若葉」でなく「青葉」の方がざぶざぶの感じが出るという意見が出た。しかし、一句の中の「若葉」「白壁」「洗う」という言葉が擬音語・擬態語を導き出していることにおいては共通していることが分かった。

五、実践例3 「雪国やはつはつはつ時計生き」の鑑賞

先に「雪国や」【】**【時計生き】**の空欄補充の試みについて記したが、ヒントも与えなかったこともあるが、擬音語・擬態語は入らなかった。そこで今度は「雪国やはつはつはつはつ時計生き」の鑑賞を通して作者が「はつはつはつはつ」の言葉を選んだ理由とその効果を考える実践を試みた。

高校生に次のような手順で実践を計画した。

- 1、「雪国やはつはつはつ時計生き」を音読する。
- 2、「はつはつはつはつ」の言葉から連想することを書かせる。
- 3、「や」が切れ字であること、その働きについて説明する。
- 4、「はつはつはつはつ」が何の音かを考える。
- 5、時計の音はふつうどう表現するかを確かめる。
- 6、5のように音を表現したとするならば「鳴る」でいい。しかし、ここは「生き」となっている。生きているのは時計だけか。
- 7、そうすると、「はつはつはつはつ」は何の音か。
- 8、言葉と言葉の結びつきによって作り出された世界を確認する。

経過と分析

- 2、「はつはつはつはつ」の言葉から連想することを書かせる。

〈生徒の記述の中から〉

- ・雪国は寒くて音がなくて静まりかえっているので時計の針の動く音がカチカチひびいていそう。
- ・白い粉雪が降っている感じ。最初に雪国とあるから雪に関連したものを連想させられた。
- ・雪が降っているところ。時計の針が動いているところ。
- ・雪がたくさん降っている様子。時刻を刻んでいる。

・静まりかえったところで、時計だけが一定のリズムで無機質に時を刻んでいる。

・雪が時計の針とともに降り積もり、時が流れている感じ。

・雪がふってくるリズムが時計を刻むように感じる。だから雪の降る音と時計の音を連想する。

・雪が降る音（様子）。時計の針が動く音。（四人）

・雪を踏んでいる音。（二人）

・人間がせっせと働いている風景。元気に動いている様子。

・元気いっぱい。しっかりと。寒い雪国で人々が生き生きと暮らしている。

・生きている人。

時計の音だけを連想した者、雪と時計をだぶらせて二つの音だと連想した者、はつらつという言葉に結びつけ、人間の動き・元気を連想した者などに大きく分けられる。雪の降り方と重ねたのは「や」が切れ字で一句がその空間を作り、雪国の世界が広がっていることを説明したことに引きずられているのかもしれない。人間の動き・元気さなど人間の「生」に気づいているものは「生き」と言う言葉から触発されたと考えられるが、音にまで結びついていないのが残念である。この句の場合は「生き」が問題なのである。

4、「はつはつはつはつ」が何の音かを考える。

表現の上から時計であるという答えを大半の者が出した。雪の音だという者がおり、その音を確認することにした。そこで次の5は5、雪の音や時計の音はふつうどう表現するかを確認する。

に変更して雪の音のイメージも加えた。

雪は「しんしん降る」と言う。降る時、雪の音はあまりしないと
いう者もいた。

時計の音はどう表現されるかを尋ねると、「コチコチコチコチ」

「ボンボン」「カチカチカチ」「チクタクチクタク」「チッチッチ

チッチッチッチ」といろいろ出てきた。

しんしんしんしん時計生き

コチコチコチ時計生き

ボンボンと時計生き

チクタクチクタク時計生き

.....

と当てはめていくと「しんしん」では違和感があること、「生き」にかかっていく言葉であるので、雪よりも時計の音の方がふさわしいとまとめ上げることができた。

6、時計の音を表現したとするならば受ける言葉は「鳴る」でいい。しかし、ここは「生き」となっている。生きているのは時計だけか。として、次に進んだ。

A 「はっはっはっはっ時計鳴る」

B 「コチコチコチコチ時計鳴る」

「ポーンポーンと時計鳴る」

「チクタクチクタク時計鳴る」

.....

C 「はっはっはっ時計生き」

とABCを比較してみた。B群だどごく普通でいわゆる報告的な作品、Aだと「はっはっはっ」と「鳴る」が結びつかない。変な句になってしまふ。一番良いのがCだということになった。これらを踏まえて、生きているのは時計だけかと尋ねてみる。すると「雪が」「雪国の人が」「時間が」「国が」という反応が出た。作者だという答えを導きたいが出てこなかった。そこで、時計の音を聞いているのは誰かと問いかけて、もう一度生きているのは誰かと投げかけてみた。作者だと大半が答えることになった。

誘導発問ではあったが、ここまで俳句の解釈を広げることができた。7、そうすると、作者が聞いている「はっはっはっ」は時計の音と

何の音か。

ここでは時計の音と何の音かと言う尋ね方がポイントになる。これまでの広がりを集約させたいからである。生徒からは「時計の音」と「呼吸の音」「心臓の音」という答えが返ってきた。

8、言葉と言葉の結びつきによって作り出された世界を確認する。

作者は自分の心臓の音と時計が時を刻む音とを重ねて聞いている。その重なった音を「はっはっはっはっ」で表し、「生き」で受けることでそれを導こうとした。こういう工夫があることを説明し、作品の構造をまとめた。

例えば「コチコチコチコチ」を使うと、

雪国やコチコチコチコチ時計鳴る……コチコチコチコチは時計のみの音で、報告的。

「鳴る」が「生き」に置き換わることで、ここに作者が入ることになり、時計の音のみでなく自分の心臓の音まで表現できることになる。その両方の音を表現する擬音語として「はっはっはっはっ」を作者は発見したのである。

雪国やはっはっはっはっ時計生き……はっはっはっはっ・生きは作者と時計の二重構造。詩的世界。

「はっはっはっはっ」と「生き」は一句の中で緊密な結びつき(必然性)があり、動かない言葉(他の言葉に置き換わらない言葉)なのである。ここに言葉の不思議さ、言葉の力を見出すことが出来る。

〈授業後の生徒の感想の中から〉

・俳句は短い文章なのに、表現したいことがたくさんつまっているということがわかりました。日本語のおもしろさが俳句だなと感じました。擬音語などで俳句の世界ががらっとかわって、個性も出てとらえ方もかわるのがおもしろいと思いました。

・俳句は言葉一つかえるだけで意味が大きく変わるもので、とても奥深いなあと思いました。

・俳句はとても奥が深く、むずかしいなあと思ったけど、その俳句に秘められた思い・情景がわかると納得させられたし、新たな発見ができてうれしかったです。

六、まとめ

擬音語・擬態語を補充する埋め字の方法を利用した指導の場合は、それを導き出す語句が明確に含まれ、しかもそれが連想しやすい作品から始めることが初期段階で大事である。

埋め字で俳句のリズム・言葉の必然性を体得し、言葉と言葉の結びつきから新しい世界が生まれることを実感しながら、創作指導も行いたい。

擬音語・擬態語を使用した俳句はその表現のユニークさに価値がある。型にはまらない、自由な発想に立った表現である。月並みな言葉では勝負にならない。独自の感覚を表現する工夫の過程で、言

語への関心を深め、言語感覚を磨くことになり、それが語彙力を培うことになるを考える。

俳句は有季一七音、一つ一つの語彙に敏感にならざるを得ない文学（文芸）である。